

コアラの同居から繁殖に至るまで

(公財) 横浜市緑の協会 金沢動物園 ○柴田 枝梨
宮川 悦子

1 金沢動物園でのコアラ飼育

オーストラリアの固有種であるコアラは小型の北方系と、大型の南方系に分類される。金沢動物園でのコアラの飼育は、1986年10月クイーンズランド州から寄贈された北方系コアラのオス2頭から始まった。翌年4頭のメスが加わり、北方系コアラの繁殖に取り組んでいくこととなった。

コアラの繁殖に取り組む国内飼育園全てが持つ課題に、囊児落下（母親の腹部にある育児のための袋からこどもが落下し死亡する事故）がある（図1）。落下の時期は大きく出産直後～3ヶ月齢・出袋（囊児が母親の育児囊から出てくること、6～7ヶ月齢）後に分けられた。こどもの体が小さいこともあり、大抵のケースで死因は不明と報告されているが、初期の死亡はこどもに何らかの原因があることが推測される。

また、出袋時期まで育つことを考慮すると、その後の死亡原因はこどもの状態以外にもあると推測した。動物種に限らず、繁殖するうえでまず母親個体に体力をつけ、ストレスをかけることは重要であり、これまでにいくつかの改善を行ってきた。原因解明には至っていないが、近年の繁殖において成育率の向上が見られたため、同居から繁殖にいたるまでの各段階での改善策を報告する。

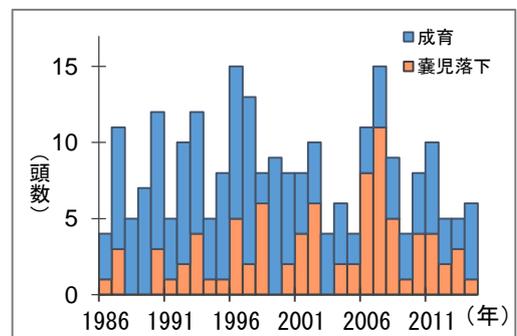


図1 国内北方系コアラの繁殖頭数

2 飼育環境の改善

① **パーテーションの増設** 2009年展示場の床を砂からコンクリートへ改修する工事に合わせ、展示場を仕切れるようパーテーションを設置した。これにより、これまで複数のメスを常に同居飼育していたが、個別飼育が可能になった。個体に合わせたとまり木の組み換えや縄張りの確保ができストレスの軽減になるとともに、正確な採食量が把握出来るようになり健康管理にも有効だった。

② **行動観察の再開** 床の工事と同時に、監視カメラの修繕も行った。発情期の多くのメス個体で、夜間床を歩く時間の飛躍的な増加がみられる（図2）。そのため夜間の行動を分析することにより発情周期を把握し、交尾に至る可能性の最も高い日に絞って同居することができる。

③ **効果的なユーカリ給与** コアラの主食であるユーカリは栄養が少なく、1日の大半を睡眠に費やすことで体力を温存している。育児期間はメス親にとって負担がかかる時期であり、時に食欲低下を招く。食欲低下は体重・免疫力の低下につながり、場合によっては病気発症の原因となる。通常よりも多くの品種を給与することで採食を促し、少しでも体調を崩さないよう管



図2 発情期に床を歩くコアラたち
こどもが生後10ヶ月を迎えると、
母親の発情が再開する

理を行う。個別飼育の環境を活かし、2014年から個体ごとの嗜好性調査を開始した。今後さらにデータを収集・解析することで、より効率的なユーカリの給与・栽培に生かすことができると考えている。

④介添え哺育の取り組み 無事に出袋（囊児が母親の育児嚢から出てくること）に至るも、こどもの体力に問題がありメス親の背から落下する事故も起きる。出袋前には必ずとまり木の下にマットを敷き、万が一の落下時に怪我をしないよう対策を行う。ただし、こどもの体重が標準よりも軽く成育不良と判断した場合、親子の展示を中止し、低いとまり木の部屋へ収容する。さらに人工ミルクで栄養補給することにより、2011年・2013年に生まれた2頭の成育不良個体は死亡事故を防ぐことができた。

3 同居実施・繁殖結果

上記のように日々の飼育環境を整え、行動分析により発情周期を割り出し、最終的にはコアラの表情などから発情が最も強い日を割り出し、オスとの同居日を決定する。スムーズに交尾に至る場合もあるが、上手く交尾体勢に持ち込めない場合もある。その場合、使用するとまり木の変更や職員のサポートにより各ペアにあわせた方法を検討する必要がある。そのため、個体に負担なく効率的な繁殖を目指すには一定程度の経験が必要とされる。

これまで金沢で繁殖したコアラは37頭だが、そのうち15頭が囊児落下により1才以前に死亡している。しかし、環境改善を行った2009年以降、出産日に死亡した2012年の1頭を除き、囊児落下はない（図3）。メス個体の環境を整えることで防げる場合もあると考えられる。

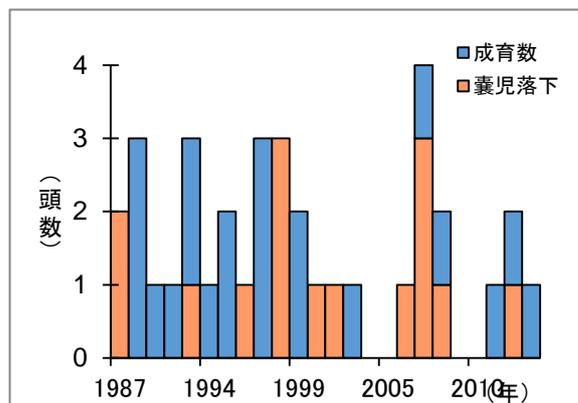


図3 金沢動物園のコアラ繁殖頭数

4 今後の繁殖

横浜のコアラの飼育は来年で30年の節目を迎え、これまで53頭のコアラを飼育してきた。今年、繁殖契約により鹿児島市平川動物公園から新たにオス1頭を借り受け、金沢で飼育中の2頭のメスとの繁殖に取り組んでいる。

昨年度、3飼育園にオーストラリアから計7頭が新規導入され、一時的な血統更新が可能となった。しかし、(公社)日本動物園水族館協会の分析によると、10年後も遺伝子多様度のある50頭を確保するためには、毎年2.5頭の新規個体の導入が必要となる。さらに、唯一の餌であるユーカリは栽培状況が天候に左右されるため、どの飼育園でも特に冬季のユーカリの確保に苦慮しており、今後も国内でコアラの飼育を継続していくためには、ユーカリの確保も重要課題である。コアラは、給与品種・ユーカリポットへのユーカリの挿し方・環境音・室温などわずかな事でストレスを感じ食欲低下や体調不良を招くため、非常に繊細な飼育管理が必要だが、来園者からの人気も健在で取り組みがいのある種でもある。今後も国内飼育園で協力し課題を解決しながら、横浜としても更なるコアラの繁殖・研究に努めていきたい。